

◆特集 座談会◆

変革の時代

同志社女子大学の挑戦

好調を維持する志願者の期待にこたえて

近年、短期大学の4年制化や女子大学の共学化など、私立女子大学の改革が顕著です。その中で同志社女子大学が行っている、学部再編成を中心とした改革のねらい、学部教育の特色や人材育成の目的はどこにあるのでしょうか。教員を中心に活発な議論を交わしながら、同志社女子大学の行く先を照らします。

出席者

寺川眞知夫

(女子大学学芸学部教授)

天野 太郎

(女子大学現代社会学部准教授)

森田 邦彦

(女子大学薬学部長、同志社広報委員会委員)

三宅えり子

(女子大学現代社会学部准教授)

小林 裕子

(朝日新聞社)

司会

太田原 準

(大学商学部准教授、同志社広報委員会小委員会委員)

時代のニーズに応えた タイムリーな大学改革

太田原 ● 本日は、同志社女子大学の改革と現状、女子教育や女子大学が求められるもの、展望についてお話しいただきます。同志社女子大学のあり方を振り返り魅力的な大学であり続けるためにはどう

あるべきか、また、社会問題や教育問題の解決に果たす女子大学の役割についても話し合えればと思います。

私は司会を仰せつかりました太田原ですが、実は同一法人内の大学にいがら、私は女子大学の事情は全然分かりません。京田辺キャンパスの門の場所さえ知らず、この会場にくるまでずいぶん遠回りしたほどです(笑)。しかし2005

きましよう。

寺川 ● 私が企画部長だったのが1997年から2001年。就任したとき既に、短期大学を改組転換するという方針ができていました。当時、短大は好調でしたが、15年で廃止したんです。同志社女子大学には、学芸学部英語英文学科と日本語日本文学科がある。短大には英米語科と日本語日本文学科があった。女子大学には生活科学部や音楽学科などもありましたが、女子大学、短大を併せると、大部分が英語英文学、日本語日本文学の分野の教員や学生でした。事務サイドにはこのまま行けば早晚、学生が集まらなくなるとの危惧があったんですね。経営面で言えば、多品種少量生産の時代に対応できない、つまり、もつと学科をたくさん作り、互いにカバーし合える体制を作った方がよいというわけです。教員面で、「リベラル・アーツ」を標榜するのであれば、もう少しいろんな分野の教員がいた方がいい。そこで社会科学分野の学部を作ろうという声がありました。これらを検討した結果、「社会システム学部社会システム学科」を作ろうとし

ましたが、この名称は最終的に教授会で否決され、「現代社会学部社会システム学科」として、文部省に申請しました。そのとき、入口として短大の2学科各200人、併せて入学定員400人となりました。となると、今までに比べると倍の学生数になるわけです。教員は新しい分野の教員に来ていただくと同時に、われわれの中でもその分野に関わる教員を充てるという方針でした。これは文部省にも認められ、法人や大学に大変助けていただき、非常にうまく動きました。社会科学系の教員に入っていたいたこととで、この系統の授業が他の学部の学生に対してもできるようになり、今も現代社会学部の授業を、他学科から取りにいく学生が非常に多いという現象を生んでいます。この学部を作る時に、若い教員から「女性が法律をもっと知っていないといけない」という意見が Outcome、全員に社会の基本である法律をきちんと学ばせることを一つの柱としました。現代社会学部設置の時には、果たして学生が集まるのかという心配や批判もありましたが、2000年にふたを開けて

みると、非常に元気な学生たちが入ってきました。結果的には成功し、志願者数も学生数も増えて女子大学の経営基盤が安定しました。

この後の一連の動きは常任委員会のもとに作られた将来構想検討委員会報告書に基づいていますが、2002年には学芸学部情報メディア学科を設置しました。情報系が弱かったので、大学全体の情報環境も底上げしようというねらいもありました。さらに2004年には、女子大学間の競争では重要な意味をもつ、小学校教員免許を出せる学科として現代社会学部に現代こども学科を設置しました。

これらの定員は臨時定員から持ってきましたが、他学科から定員を割いてもらいましたので、他学科には抵抗もなかったと思います。しかし、一部の都合で大学全体がだめになるというのは困る。長期的に見た場合、経営基盤を安定させ同志社女子大学を健全に存続発展させるためには、ある部分で痛みを伴うことを理解してもらい必要がある。

そして2005年に薬学部が設置され



寺川 眞知夫
【てらかわ まちお】

1972年、同志社大学大学院文学研究科国文学専攻修了。現在の専門分野は国文学。主な著書は、『日本国現報善悪霊異記の研究』（和泉書院、1996年）、『説話論集』第11集（共著、清文堂出版、2002年）、上田正昭編『古事記の新研究』（共著、学生社、2006年）。

ますが、これも将来構想検討委員会報告書に基づいています。武庫川女子大学に薬学部があり、ある程度ステイタスができています。それをモデルとして、本学にも薬学部を作りあわせて理系分野の充実もはかりたいと考えてきたわけです。2007年にできた国際教養学科については、英語英文学科とは少し違った観点で作った学科です。これは時代にマッチした側面もあって良かったと思います。やはり、時代の要請に 대응することと、われわれのレベルの大学でできることは何かを考えること。この2点を考えているわけです。無理はしない、大学の教育に似合わない妙なものも作らない、応分の教

改革の推進力となった 常任委員会

太田原●改革を積極的に推進できた背景には、何があったのですか。

寺川●これらのことができた背景には、常任委員会の存在があったと思います。

児玉学長になるまでは常任委員会という体制はなく、課題ごとに検討委員会が作られ、検討委員会で話がまとまる頃に委員を委嘱した学長の役目は終り、任期が終れば報告書はお蔵入りになることもあった。これではとても大学は継続的に動いていけません。そこで、長期的展望に立ち、学長が交代しても事業が継続的に長期的に実現されるシステムを作ろうということ、常任委員会ができました。これは部長と担当職が中心となって学長を補佐する、全学的な組織です。これによって迅速に、継続的に動ける体制ができた。毎年夏に三日間集中討議と称して連続会議を開き、常任委員会では検討課題の進み具合を確認し、内部的にはありますが公表もしています。これで行き当たりばつたりの小企業から、少なくとも長期的展望をもって組織的に動ける中企業くらいにはなつたかと私は思っています。それで外部から見ると、非常に迅速に動いているように見えるのだと思いますね。

太田原●常任委員会は教員人事もするのですか。

寺川●そうですね。教員の配置には文科省の設定した、一定の枠がありますね。学科ごとの教員数と大学全体の人数という、2段階の教員枠。大学全体と学部学科の教員数とをみながらどの学科に配置していくかは常任委員会で検討し、最終的な判断は学長が行います。

太田原●教員の定年を動かしたのも常任委員会だったのですか。

寺川●昔は65歳が定年で、大学院の授業を担当する教員は、70歳までという特権階級でしたね。これについては、かつての一般教育の先生方から不公平だという批判がありました。これを一挙に解決したのが、定年になつても希望すれば全員

が70歳まで残れるが、給与ベースは下げるというシステムです。短大を4年制にした時、学生数は増えました。6000人という、日本の女子大学ではトップクラスです。それに伴って経営は安定しましたが、全員の給与をそのままとした定年延長には堪えられないので、人件費の調整を行う必要があったわけでしょう。

太田原●常任委員会ができる一方で、従来の教授会の機能に変化はあったのですか。

寺川●少なくとも経営責任は常任委員会（＝学長）が負い、教育の責任は教授会が負います。責任の線引きが難しいとい

う声もありますが、そこを明確にする努力はしてきたと思います。また、本学には全学教授会と学部教授会があります。学部教授会は、ある意味ではプライベートな部分。公的なものは全学教授会がやっています。同志社大学のような学部自治がある体制ではありません。

太田原●隣の大学なのに、全然違うんですね。

寺川●そういう意味で、これも大学が迅速に動ける一因になつたと思うんですね。学部完全自治なら、学部が反対すれば話が進まない部分もあったと思います。

教育理念の共有を推進する ブランド構築委員会

太田原●次は現在進行中の女子大学ブランドの確立について、天野先生からお願いします。

天野●私は2004年に社会システム学科に着任しましたので、今年で5年目。まだ比較的新しい教員です。女子大学のブランドの確立のため、私たちは200



天野 太郎
【あまの たろう】

1997年、京都大学大学院人間・環境学研究科中退。現在の専門分野は人文地理学。主な著書に、長谷川孝治編『地図の思想』（分担執筆、朝倉書店、2005年）、『近畿II 地図で読む百年』（分担執筆、古今書院、2006年）、『京都の地名検証2』（編著、勉誠出版社、2007年）、『日本と世界のすがた』（共著、帝国書院、2008年）

6年10月に「ブランド構築ワーキンググループ」という検討委員会を設置しました。ここでは比較的若手の教員5人と職員5人の10人が、フリーな形で月に1、2回、多い時は毎週議論を重ねてきました。これには、学部学科の増設により数年前と比べて教員の構成が大きく変わった中、ブランドを再確認し、その価値を高め、学生さんにその価値を提供していくという意義があるんですね。私は委員長として、取りまとめをさせていただきました。

ブランド構築という点、最近どの大学でもされていることですが、ややもするとおしゃれなロゴや聞こえのいいキャッチフレーズなどが一人歩きをするような傾向もあると思います。私たちが考えるブランドとはそういうものではなく、教職員、学生という同志社女子大学の構成員、業者さんなど女子大学に関わるすべての人々の一人ひとりが、「同志社女子大学とはこんな大学」という、明確なメッセージとして共有するシステムを作らねばならないと思います。あるいは自分の大学を好きになるようなシステムを

作っていくという立場で、ブランドというものを捉えています。今年5月に「クレド（写真）」を作ったのも、その一環です。二十数項目からなるもので、同志社女子大学の教育の理想などが書いてあります。これを嘱託講師やアルバイトも含めた教職員、食堂や清掃の委託業者全員が携帯し、共通認識として常に確認していくというわけです。例えばここに、建学の精神や



「クレド」。折りたたむと名刺サイズ（右側）

同志社女子大学の教育の理想などが書いてあります。これを嘱託講師やアルバイトも含めた教職員、食堂や清掃の委託業者全員が携帯し、共通認識として常に確認していくというわけです。例えばここに、建学の精神や教育理念が書いてあります。これを作るにあたり、私たちのグループでは若手が多いものですから、同志社の歴史を調べたり史料を発掘したりしました。過去に回帰すればいいというものではありませんが、そこで建学の初期の精神は、予想以上に今に生きていることを再確認しました。その中で、やはり私たちはキリスト教主義、国際主義、そして英語の大学名にもなっているリベラル・アーツを大切にしていかなければならない。これを分かりやすく説明したのがクレドです。民間企業、特にサービス産業では、このようなものをよく作って、社員が常に携帯していますね。私たちも同じようにクレドを持つことによって、意識を高めていこうと。この「考え続ける姿勢」も、ブランドではないかと考えています。

太田原●トヨタの社員も手帳にトヨタ綱領を貼って、常にそれを参照しているらしいですね。

天野●これだけ新学部、新学科をどんどん増設してきますと、教員がどんどん増えてくるわけですね。2000年以降に入社した教職員の方が多くなっているの

が現状です。私も京田辺キャンパスしか知りませんし、今出川キャンパスのみの時代のことはもちろん知りません。今まではたぶん、全学教授会に見られるように、コンパクトにまとまって全学で考えていこうというのが同志社女子大学の方針だったと思いますが、このように今出川キャンパスのみの時代の経験を持つ人が減ってくると、同志社女子大学とはどんな大学かを振り返る機会が非常に少なくなってきたように思います。それを、ふと手を休めて考えるきっかけが、僕はクレドだと思っていますし、ブランドを考えることだと思っています。

太田原●皆さん、ネームプレート（写真）



ネームプレート

もしておられますね。

天野●これも今年の5月から付けています。ブランドの話以前から、教職員にはネームプレートを付けてほしいという要望が出ていたと聞いています。職員は付けていましたが、教員も付けてほしいと。他学部ともなると、学生から見れば先生なのか誰なのか分かりませんから。

太田原●クレドを共有し、名札を付けて、話す言葉も何だか民間企業の人のようにですね（笑）。私は商学部だから慣れています。でも、それでも驚きがあります。

三宅●ネームプレートは、私もいいなと思っていました。裏面にミッションが記載されているんですね。アメリカの女子大学に関する有名な研究の一つに「Taking Women Seriously」というのがあり、そこに「アメリカの女子大学から学ぶ七つのレッスン」というものがあります。レッスンの第一番が「学校の使命、教育理念を教職員全員が周知していて、毎日それを実践している」。ネームプレートはまさに、これなんです。さすがだと思っています。

キリスト教主義教育と
リベラル・アーツ教育が
医療人にふさわしい
人格と教養を育む

太田原●次は森田先生。新設された薬学部について、どんな学部にて育てていこうとお考えですか。

森田●そもそも本学のベースであるリベラル・アーツに対して、薬学は実学。まったく相容れない学問領域なんです。その昔、新島襄先生と福澤諭吉先生は仲が悪かったと聞いています。福澤が実学を実践しようとしたのに対して、新島はそうではない路線。実際、リベラル・アーツの中にぽつんと作られた薬学部は、うまく行かないなあというふうに感じ続けてきました。制度的に相容れない部分もありますので、私だけでなく学部の教員全員が、苦悩に満ちた4年間を送ってきたというのが本音です（笑）。

しかし一方で、キリスト教主義は薬学教育や医療人の養成に一番役立つという思いがあるんですね。「キリスト教主義という、人格形成の理念があった方が



三宅 えり子
【みやけ えりこ】

1994年、スタンフォード大学大学院教育学部比較国際教育学専攻修了。現在の専門分野は比較・国際教育学、ジェンダー研究。現在の研究課題は、日本型フェミニズムの特性。民族格差、階層格差、男女格差を克服する試みとしての米国高等学校事例研究。2004年、ハワイ大学教育学部客員研究員

寺川●他の女子大学では内部の高校から大勢上がるなど、推薦の割合が高いですね。本学はそういうのが、ほとんどない。内部の高校からは同志社大学へ行つて、同志社女子大学には来る人が少ない。それでこれだけ一般から応募者があり、それなりの偏差値を維持している。僕はなかなか頑張っていると思う。

三宅●でも私は、外部へのピールが

情をお話いただきました。今度は、新聞社の取材活動を通じて教育現場の問題、大学改革などのトピックに密接な関わりを持ってこられた小林さんに伺いましょう。同志社女子大学の改革、教育について、問題提起を含めてお話しいただきますか。

小林●先ほどから新学部創設やブランド確立のお話がありましたが、クレドやネームプレートについては、これからどの大学の受けようかと模索している外の人たちにとっては、同志社女子大学の中身が見えてこない感じがします。数多くある女子大学の中で、同志社女子大学は志願者数は多いですが、昨年度入試を見

の中にあるということとは、それだけ優秀な学生が来ていることになるんです。最初からここに来るといふ推薦入試の人たちは4割ほどいる。同志社女子大学に来たい人たちが、ある種の憧れを持っている人たちですね。一般入試では、いわゆる関関同立のラインの下にある。あるいは国立なら、教育学系の大学と重なっている。そういうラインに重なっている人たちが流動的なのは、仕方のないことです。むしろ、そうならないことの方が問題があると思います。僕は一般入試で定着率が良いというのは、あまりいい学生が集まらないことだと思っているんです。

天野●本学は推薦の比率が、他大学に比べて低いんですね。

寺川●他の女子大学では内部の高校から



森田 邦彦
【もりた くにひこ】

1981年、京都薬科大学大学院薬学研究科薬学専攻修了。現在の専門分野は、医療薬学、薬物動態学、臨床薬理学、感染症治療。主な著書に、『ポケット版 抗菌薬の処方ガイド』（分担執筆、羊土社、2003年）、『Nursing Mook 17.臓器移植ナーシング』（分担執筆、学研 2003年）、『日常診療に役立つ抗菌薬のPK/PD』（共著、ユニオンエース、2006年）、『わかりやすい調剤学』（分担執筆、廣川書店、2006年）

と言われる人材を育てたいと思い、模索を続けているところです。現在、全国に薬学部が次々と新設されています。しかし定員割れの大学が大半で、中には25パーセントしか充足されていないところもある。その中で、うちは競争率4・0倍を維持しています。これは同志社女子大学というブランド力のなせる業であると、われわれもメリットをじわつと実感し始めているところです。

三宅●薬学部の学生たちに接して感じるのですが、「近代日本と同志社」という授業ではとても熱心な学生が多いですね。

教えやすい」と、医学部の先生から指摘されて、なるほどと思いました。現代は、医師と患者は対等という時代。双方のコミュニケーションが大事とされます。そういうコミュニケーションが図れる人材を育成しようというのが医学部では大きな命題ですし、薬学部も6年制になってから非常に重要視されています。

実践できるのではないかな。われわれ薬学部で育ってきた教員にとつては、いいタイミングで、180度異なる、よい環境に置かせてもらったとも思えるんです。太田原●どのような女性薬剤師を養成していきたいのですか。

森田●薬剤師は男性より女性の方が向いていると、私は昔から思っているんです。従来の女性は、ともすればマニュアル的な部分は非常に得意だが、枠を取り払ったところのクリエイティブなこととはちよ

つと苦手という意識があった。このクリエイティブな面を実践していける教育を目指していこうと思っています。「さすが、同女（同志社女子大学）の卒業生」

天野●現代社会学部の中に京都研究会という組織があつて、京都でフィールドワークをしています。他学部の学生も入れています。先日宇治を巡見した際、20人中4人が薬学部の学生でした。そういうところでも、リベラル・アーツの雰囲気はあるようです。

大学の魅力を 外部へ効果的にアピールするには

太田原●今までは、同志社女子大学の実

代は、今までの薬剤師養成教育になかったものですし、6年制教育の今後に求められるものでもあります。この本学のリベラル・アーツの環境にあるからこそ、現代の薬学部や医療人に求められる教育が

と



小林 裕子
【こばやし ゆうこ】

1993年3月同志社大学文学部英文学科卒業。2000年、朝日新聞社に記者として入社。岡山総局、京都総局を経て、06年4月から名古屋本社報道センター文化グループに所属。教育分野を長く担当し、教育行政や小中高校、大学が直面しているさまざまな問題取材。美術と映画の担当を経て、現在は音楽と学芸に関する記事を執筆している。

社会貢献力として世界各地でアピールしているんですね。アメリカでは今この大学でも、マーケティングにすぐ力を入れています。

天野 ●私は、ブランドを作っていく時は、まず外部向けよりも内部で共通認識を高めることが大事だと思うんですね。これが5年後、10年後になっても名札を付けているだけだったら話になりませんが。クレドや名札はまだ始まって間もないので、これからという段階。内部で進行中の段階なので、外向きには見えてこないのかもしれない。

見えてこないという小林さんの指摘は、非常に鋭いと思いますよ。アメリカで大学経営について、こういう本があるんです。“*Remaking the American University: Market-Smart and Mission-Centered*”——いかにうまくマーケティングするか、いかに大学の使命、教育を打ち出していくかを書いた本です。本学は、使命についてはできていると思うんです。課題は、それをどう世間へアピールするかですね。

例えばスタンフォード大学では、“*Leading Matters*”という世界的なアピールを行っています。これは地球規模の重要課題に大学が率先して取り組んでいる

ことをアピールするための大学の広報活動です。学長とプロジェクト代表の教員2人が東京、香港、ヨーロッパ、アメリカ各地を回って講演しています。私は4月に東京の講演に行ってきましたが、300人が参加していました。たぶん寄付金の依頼があるのだろうと思っていたら、それは一切なしで、学部間の壁を取り払って環境問題に取り組んでいるというメディアを駆使したプレゼンでした。アフリカの村へ教員や学生を送り込んで水質調査をしたり、モントラレーにある世界有数の水族館と協力して、生態系が環境とどう連動して変化しているかを研究したりしています。それを、大学の国際

国際的な知名度向上と「満足度の高い大学」であるためにさらなる教育改革を

寺川 ●今後同志社女子大学がどういう方向へ行くのかという場合、例えば国際教養学科を作りましたね。これは今までと少し違うやり方だと思います。つまりわれわれは、欧米の文化を受け入れて日本に紹介するというやり方をずっとしてきたわけですね。英文の場合主として。し



太田原 準
【おおたはら じゅん】

2001年京都大学大学院経済学研究科博士課程修了。現在の専門分野は経営史。工業経営論。現在の研究課題は、自動車産業を対象とした経営学・経営史の実証研究。主な著書に、「東アジア優位産業の競争力」「アジアの二輪車産業」「中国製造業のアーキテクチャ分析」

かし、国際教養学科は英語圏の文化を受け入れ、英語圏に積極的に出て活躍できる能力を持った女性たちを育てようとしています。国際教養学科の場合は企業戦士になって出ていく女性がいるでしょうから、これは少し違った面があるといえます。それでも国際主義を唱えながら、常に基本的には英米文化を受け入れるという形なんです。

すると、同志社女子大学は何をもって外国へ出ていけるのか。今後のことを考え、もし日本だけでやっていけない時代が来たとしたら、うちは何をもつて外国人に来てくださうのか。そういう得意分野も力をつけておかないといけない。学生を外へ送り出すだけでなく、外国の学生を受け入れるシステムも作らなと、将来的には発展しないと思います。そこでさっきお話が出たように、国内的にもそうですが、外国へ向けても発信していかないと、大学の発展はないと思うんですね。同志社大学へ行けば留学生はたくさんいますが、本学はそうではない。COEが取れないのも、リベラル・アーツを言うあまり、大学院教育がそろそそかになつていくからです。非常に高度な教育をする大学院として作り変えていかないと、本学は遅れていくんじゃないか。大学院は今までは一種のステイタス的な面があったかもしれませんが、もつ

と「こんな教員がいて、こんな教育・研究をしている」と、実績をアピールできるようであれば、地盤沈下するのがいいところではないかと思っているんです。そのためには、大学院改革をきちっとしなければいけない。学部の添え物的な大学院ではなくてね。

天野 ●内部で教育・研究を高めていくのは非常に大事だと思います。

寺川 ●そうですね。今までは組織の改革を中心をやってきたけれど、今度は組織・教員も含めながら、本学が本当に力をつけていくためには何をすべきかを考えていかないといけないと思っています。形を整えたり、人数を増やしたりするだけで終わってしまうてはいけません。

天野 ●先ほどの定着率は人口の話だと思うんですが、私たち教育をする側の人間からすると、定着率の問題は大なり小なり、どの大学にも背後にあると思うんですね。国立大学でも、京大でも阪大でも、実は「東大に行けなかったから」というのがあるかもしれない。それは実際に東大を受けなかっただけで、「見えない定着率」というのがあると思います。

ただ、教育で大事なものは、その後のこと。二次志望でも三次志望で入ったとしても、学生が「この大学に入って良かった」と思える教育ができるのが大事だと思います。それが大学の満足度などにつながっていくのではないかと。

寺川●その面は絶対にあると思います。われわれも常に学生から評価されるわけですが、目先だけでなく、卒業する時、社会に出た時に「ここへ来て良かった」と思ってもらえるようにね。

三宅●今のところは、そう思ってもらっていますよ。全体的に満足度が高い。

天野●単に設備のことだけでは満足感が、一定程度得られている。そこで私も、大学院は非常に大事だと思っています。リベラル・アーツ教育というのは、どちらかと言うと教養というイメージがあつて、大学院教育と相容れないんじゃないかというイメージがあると思うんですね。私は前任校が京都大学の人間・環境学研究科でした。そこは教養部を改組したところです。学部を持たない大学院大学として教養部が生まれ変わったというのが面白い。教養部というのはリベラ

ル・アーツで、他の学問もつまんで幅広く勉強しようというものであると同時に、非常に高いレベルの専門性を持たせて、その中で文学と歴史、歴史と考古学、あるいは考古学と建築学など、他分野や隣接分野を取り込みながら高いレベルの研究をしていくというのが、私は真のリベラル・アーツじゃないかと思うんです。リベラル・アーツを含めて、私はそこに大学院教育の一つの解答があると思います。

寺川●広い視野の知識を自分で総合的に組み立てて、自分でものを考えられる人に育てないといけないと僕は思っています。本筋の話じゃないけど、暗記はおろそかにしてはいけないと、僕は基本的に思っているんです。物事を判断する時に知識がなければ、いったい何をもつて判断するのか。知識をうまく獲得する方法と使いこなすための方法を、大学では教えるべきだと思います。そうすれば学生は、本当の意味で伸びていくんじゃないかな。

小林●卒業した人は満足度が高いことを私たちは分かっていますが、これから入っ

てくる人たちに対して、大学の満足度の高さをどう伝えるかが問題になると思います。

寺川●口の悪い人は「同女（同志社女子大学）の学生は批判精神を植え付けられていないから、満足度が高いんだ」などと言います。批判精神があれば「授業に満足した」なんて、とても言わない（笑）。まあ、それはあり得る話だと僕は思いますよ。女子大学は、わりあい満足度が高いということがあるのかな。

森田●満足度の高い大学の上位校は、たいてい女子大学や女性比率が高い大学が多いですね。

太田原●ベネッセ教育研究開発センターが2007年に行った「全国大学満足度ランキング」では、前回調査と同様に、同志社女子大学は総合3位です。

寺川●その3位が何なのかを具体的に示していかないとけないというのは、確かに小林さんのおっしゃる通りです。

就職事情と学生の質の維持

小林●同志社女子大学の学生は大学に何

を求めて入ってくるのかをお聞きしたいと思っています。いい企業に就職したいのか、資格を取りたいのか、どうなのでしょう。進路・就職アンケートのデータを見えますと、資格・免許が欲しいと答えている学生は多いのに、企業訪問をしなかった人が6割を超えていたり、OG訪問をしなかった人が8割近かったり、インターシップの参加人数が減ってきたりしています。資格取得支援講座も、講座数が増えているのに受講者数は減少しているという結果が出ている。この就職活動時の積極性のなさ、アンバランスは何なのでしょう。

太田原●企業訪問をした人が少なかったのは、合同説明会や企業説明会へ相当数が行くため、この時点で企業訪問のような活動がかなりの部分済んでいるという傾向があると聞いています。

寺川●資格支援講座は学生サービスの一環で始めたものですが、開始当初は非常に利用が多かった。就職難だと、そういう講座へ集中しましたが、ある程度景気が回復してきて学生側が比較的自由に就職を選べるようになったので、利用が減

ってきたのではと僕は思っています。また、「氷河期」と言われた頃は、学生が危機感を感じていました。特に、女子学生の就職は男子以上に厳しかったのでなおさらです。しかし、売り手市場に一転したこと、女子学生を積極的に採用する機運の高まりから、以前のような緊張感がなくなり企業訪問、OG訪問が減っているのではないのでしょうか。

三宅●薬学部などは明確な目標を持って入ってくると思います。でも、現代社会学部などですと、具体的に明確な目標を持って入る人は少ないように思います。だけど彼女たちはやはり、学びたい、向上したいという意欲があるのが分かります。いろんな体験や経験をする場を与えるとよい反応が返ってくるんです。こちらの、持っていきようにかかっていると思います。

天野●可能性を導き出してあげるような仕掛けを、大学が作ることが必要なんだと思います。それから、以前はインターシップに行くと、あたかもその企業に推薦があるかのような錯覚を持つ人がいたけれど、インターシップの意義は本

来、実社会を体験することにあつて採用とは関係ないはずですよ。インターシップに参加する学生が減ったということとは、この意義を学生が正確に理解した結果ではないかなと、僕は思いますけれど。短いスパンでデータを見ると、やはり景気や就職事情の関係で数字が乱高下しますので、もう少し長期的に見ることが必要だと思います。

寺川●学科によっても、学生の考え方はかなり違います。英語英文学科の学生たちなら、英語を使った就職を考えている。日本語日本文学科では、文学部や国文学科がなくなっていく大学がある中、本学には就職がよいからというよりまだ伝統的な学科が残っているから同志社女子大学へ来たという学生もいます。日本語教育を勉強して外国へ行って日本語を教えるんだという、夢にしろ明確な目的を持った学生も昔はいたけれど、外国語が得意ないとそんなくまは行かないことも分かってきて、学生がシビアに就職を考えるようになった。ただ文学分野であれば、古典文学や近代文学などを勉強したという、目標を持って入ってくる学生



たちがいる。その学生たちはあまり最初から就職については口にしないですね。去年あたりからそういう学生が多くなってきたように僕は感じます。学生の質が変わってきたのは確かですね。

小林●学生の質の維持、確保はどのようにしているとお考えですか。

寺川●偏差値を高めて、入試課や広報が頑張って学生を集めるということでしょうか。量は質を支えると思います。

天野●現代社会学部ですと、法律をある程度体系的に学べるのが結構珍しいと思います。そういう意味で、公務員、もしかしたら司法関係へステップアップできる。ロースクールへ進学する学生もいます。そういう可能性

を提供できることが大切。あるいは、私自身も所属していますが、京都学や観光学。今はどの大学も取り入れていますね。同志社女子大学は2000年、現代社会学部ができた当初から京都学を打ち出しています。町家で教育をするということも実践している。これらの取り組みが、選択肢を増やす、幅広い学生を増やすことにつながるのだと思います。

京田辺の利点を発信しよう

小林●それこそ、京都にあることの意義、どこにも負けないコンテンツですね。あと気になったのは、京都女子大学。京女と同女はよく比べられますね。京女に流れる部分は、学費の問題ですか。

寺川●いえ、そんなことはないと思いますね。それよりも、ここ数年で京女との間に偏差値の差が少しいたんです。受験生の心理としては、偏差値の高いところへ行つた方が、かつこいい。そこで京女に流れる部分があるのではないのでしょうか。あとは、立地の問題ですね。東京でも郊外へ出ていった大学が、都心回

帰を始めている。本学でもある部分、同じことをしようとしています。英語英文学科と日本語日本文学科が今出川に移った時に、どういう現象が起こってくるかが問題だと思っていますね。

小林●2009年に開設される表象文化学部は、どういうものですか。

寺川●学芸学部の英語英文学科と日本語日本文学科が今出川に移って表象文化学部となるもので、中身は大きく変わるわけではありませんが、文化に対する新しい視座を導入して教育を展開していくようにしています。

天野●京女との間に差がついた一因として、ある種、同志社女子大学の地理的位置が正しく理解されていない部分があると思います。京都女子大学は都会で、近郊の学生が行くのに便利。それに対して京田辺はいなかだ、というように。僕は、これはある種の錯覚じゃないかと思っています。

寺川●京田辺の方が便利なんです。

天野●僕はそこを言いたいんですよ。現代社会学部は幸か不幸か京田辺に残りますけれど、私は大阪に住んでいるんです

が、京大に通学していた時と同志社女子大学に通学する時間を考えると、京田辺の方が圧倒的に移動時間は短縮されている。実は、奈良や大阪からは、京田辺の方が明らかに速く来られるという地域が増えているんです。京都という地域のブランドも必要だと思いますが、自宅通学生が女子大学には多いという実情があるんですね。大阪はもちろん大きな人口を抱えていますし、奈良は大阪への通勤エリアとして発展しています。奈良や大阪の方に対して、京田辺という場所が三都の中心として歴史や文化をもつことや、共通の利便性が高いことを外部へアピールしていけば、もっと変わってくると思っています。

男女「別学」の利点を生かす

小林●もう一つ、同志社大学に新しく生命医学部ができましたね。例えば女子大学に先にできていた薬学部の「いいとこどり」をして、新しい学部をどんどん作っていくような感じもします。それなら同志社大学は、女子大学を併合して大

きな総合大学にしてしまおうというお考えはないのでしょうか。

太田原●もう、その論点へ行きますか(笑)。

森田●難しい問題ですね。でも例えばもしも同志社大学と合体しても同志社大学に類似の分野のない生活科学部や薬学部はそれはそれで比較的女子学生の多い学部として住み分けられるのではないかと、薬学部の教員は本音では思っているんです。ただ、今のような特色があるからこそ其学とは別の女子大学として成り立っている部分があるのかもしれないと思っている。なので、一緒になることがいいのかというと、果してそうなんだろうかと…そのへんがよく分からない。

寺川●実はある時期、生活科学部を京田辺に移転しようとしたことがあるんです。結局、それはうまく行かなかった。僕の意見では、あれは全同志社的な規模でものを見ていなかった。つまり、同志社大学の理系学部は京田辺にあるわけですね。バイオ系のことは京田辺でやっている。そういう部分で生活科学部とも連携できれば、結構機能すると思うんです。

今出川の教員たちは京大を意識しているのかどうか、京大とつながっているのかどうか僕は詳しくは知りませんが、京大とつながるのがいいのか、同志社の中で連携するのがいいのか、どちらなのかという考え方の問題があったと思います。長期的に見て、生活科学部が京田辺に来ていけば、薬学部もできたことだし、もつと違った展望が開けたのではと思うんですね。

同一法人内に共学と女子大学を設置しているのは、本学と学習院だけだと思います。学習院には理科系はありませんけれど、あそこも男女共学の4年制と女子大学の4年制の二つがありますね。同志社女子大学としては自立していくということで、今までいろんな対策を練って、それなりの力は蓄えてきたと思っていますけれどね。

森田●薬学部の学生一人ずつにインタビュしますと、「女子大学だから来た」という人が意外に多いんです。それなりの魅力が、女子学生の間にはどうやらあるようなんですね。これは、安易に共学と合体すると、ひょっとしたらアイデン

ティティがすべて無くなってしまつて、むしろマイナスになる可能性があるかもしれないと感じる部分があります。

三宅●私の専門は比較国際教育学です。いま世界的な新しい流れとして「別学化」が脚光を浴びています。アメリカでは250の公立中学校で、実験的に別学を実践中なんです。アメリカ、イギリス、オーストラリアでは、小・中・高校について、大規模な別学、共学の実践的な比較研究があります。どちらで教育を受けたら学力が伸びるかを調べた結果、共通の結果として、男女ともに共学より別学の方が学力が伸びた。アメリカでは親の階層との相関関係を調べましたが、関係はない。別学の方が、それぞれに適した教育ができるという結果が出た。イギリスでは2年前に、学校規模は180人がふさわしく、できるだけ別学にした方がいいという提言を出しました。

これは決して共学を否定するものではないんですが、なぜ別学が良いのか。最近脳の研究が進んできて、男女では違った時期に、違う部分が、違うスピードで発達するというんですね。もちろん男

女の能力に差はないし、脳は同じです。ただ、女子の場合は言語能力と手先の器用さが男子より6年も早く発達・形成されるんですってね。逆に空間認識能力は男子が4年早く発達する。それから別学の方が、異性を意識せずにのびのびとやれる。特に女子校では理数系が伸びるようなんです。男子校では文系が伸びるという結果が出ています。

太田原●その論理が大学まで延長できるんですか。

三宅●アメリカでは女子大学の教育成果に関する研究がたくさんあります。具体例としては、国会議員や優良企業のトップなど、アメリカ社会で活躍している女性の3分の1は女子大出身だそうです。例えば Wellesley College や Smith College などは、女性をどういうふうに教育すればいいかというノウハウを、かなり持っています。

太田原●それは20歳ごろから女性だけを分けて教育すると、社会性やリーダーシップという資質が育つという研究がされているし、実証されているということですか。

三宅●そうです。私もそのへんをこれから勉強していきたいと思っています。

森田●今のお話を薬学部の教員にぜひ伝えたいですね。

天野●今の三宅理論も大変励みになりましたが、歴史的な経緯を見て、なぜ同志社大学と同志社女子大学という二つの学校があるのかを考えた時、全国的な女子大学の共学化の流れがあるが、それでいいのか、それは本当に成功しているのかを、今一度考えることも大事なのではと思います。

寺川●焦って共学化したところは、むしろ失敗していると、僕は見ています。新学部や学科を作ったところはまだいいとしても、今まであった基本的な学部・学科を変えてしまったところは、たいてい失敗しているんじゃないですか。

太田原●同志社女子大学の2000年度以降の改革は、経営的には成功していると考えていいんですか。タイミングも良かったとお考えですか。

寺川●当たりすぎるほど、当たっていると、僕は思います。大変だった時期もありましたが、力はつけたと思います。

「良妻賢母」教育から 「キャリア志向」型教育へ

太田原●経営的にはうまく行ったというお話でしたが、教育の内容についてのお話を聞かせてください。例えば薬剤師や管理栄養士というのは、一定の力をつけないと国家試験が受けられませんか。ですから教育としては、その一定のレベルの知識まで持っていかなければならない。他の学部についてはそういう物差しは当然ありませんから、それも含めた上で、同志社女子大学全体の「学士力」と今後の女子教育について、ご意見を。同志社女子大学が目指す理想の女性像についても伺いたいです。

寺川●同志社女子大学の理念の中に、教育の一つの方針として、おそらく遠い昔には良妻賢母ということはあったと思うんです。先ほど三宅先生から、女子大学を出て社長になっている人のお話がありましたね。

太田原●社長の出身大学ランキングでは、全国的女子大学の中で同志社女子大学は13位と、下の方ですね。

寺川●例えば東京なら、津田塾などは社会的な活動をしている卒業生が多いですね。本学の卒業生には、社長の奥さんなど大きな組織のトップを支えてはおられる方は多いけれども、自前のお金で自由に寄付していただくわけにはいかない。大学にとって同窓会はとても大事なんですが、そういう面では無理な部分があります。そういうことも含めて、社会に出て働ける女性、自立する女性を育てようということは、現代社会学部を作った時に議論されました。社会システム学科にしても、社会の仕組みをよく押さえた上で、いろんな場で活躍できる女性を育成しよう。一つの明確な教育方針の転換をしたわけですね。

その目的がどこまで達成できているかは、まだよく分かりません。日本語日本文学科の演習の授業でも、僕は繰り返し学生たちに言っているんです。「自分のやっていることが何であるのか、どういう力を身につけていくのかを自覚しなさい」と。日本文学をやっていて、情緒的なものに対する感覚が鋭敏になっていくのはいいが、鑑賞して「ああ、良かった

ですね」で終わってはいけません。われわれは研究しているわけです。研究では、データを集めて処理し、そこからある程度の方向を見出し、結論を導いて論文を書いていく。この方法はどの分野でも同じことです。そういう意味で学生たちは、世の中に出た時、自分たちはどういうふうにもものを見、考えていくのかという基礎訓練をしているわけです。そういう教育をして学生を育てていきたいと思っています。

太田原●まったく同感です。

三宅●昔は良妻賢母だった教育方針の転換が行われたのは、社会システム学科を作った時ということですか。

寺川●明確に学部設置の趣旨の中に打ち出したのが、その時だと思えますね。その時は既に、良妻賢母という言葉も口にされなくなっていましたけれど。

三宅●ジェンダー研究を少しでもかじっている者としては、「良妻賢母」という言葉はどうしても引つかかるんです。それ自体は良い言葉で問題ないんですが、それに対応する男性用の言葉「良夫賢父」がないこと、さらに、「賢母」といって

も、母になれない人もいるし、今は母にならない人もいる。「良妻」といっても妻にならない人もいるし、他にもっといろんな生き方がある。良妻賢母と言うことによって女性を一つの型にはめてしまうことが問題なんです。

先ほどの教育方針に関して『ジェンダー・トラック』という本がありまして、東京の女子大学6校を三つのタイプに分けています。キャリア養成型、良妻賢母養成型、その中間型。そして彼女らの大学卒業後のライフコースを調べて、そのライフコースに最も影響を与えたのは何かを調査した。非常に高度な統計処理を行っています。すると、一番大きな影響を与えたのは大学の教育方針であるという結果が出ました。女性の家庭的背景などの要因より大きいと。だから、大学がどういう方針を打ち出していくのかは、非常に重大だと思います。

太田原●新聞社に限らず、女子大学から来てほしいというニーズは、現場にあるのでしょうか。

小林●男女共学も女子大学も関係ないと思います。本人次第ですね。私も今回、

第一次面接の委員をしました。現在、エントリーシートには大学名を書かないようになっているので、そのあたりはちょっと分かりません。

太田原●同志社女子大学として、違いを打ち出してきたことは分かった。皆で教育のクオリティーを上げていこうという活動も始まっている。次は、この違いを分かってもらい、おそらくその先は、違いを評価してもらい、ここに来ると思います。キャリアタイプの教育をするようになったが、これを社会にどう分かってもらうのか。天野先生、いかがでしょうか。

天野●キャリア教育そのものは、共学でも女子大学でも同じですよ。私たちは男女別学にすることによって、女子により効果的な教育をしていく、または可能性を育てる。共学の場合は少し引込み思案になるかもしれない人も含めて、女子大学で本人の可能性を引き出す、またはサポートするような教育を、キャリア教育の一つとしてしているんだと思います。

三宅●女性は特に「サポート」に敏感で

すよ。どれだけ先生が自分の能力を信じてくれているかに非常に敏感に反応する証拠を、私はちゃんと持っています(笑)。**天野**●それが、ややもすると手厚くなりすぎることありますけれどね。同志社大学ではたぶん考えられないような手厚いサポートを、女子大学では新入生に対して行っています。オリエンテーションは合宿で1泊して、学校のシステム紹介、シラバスの説明など全部やっている。新島襄の墓参にも行く。導入教育の一環も兼ねて、手厚くやっています。

学生自身が リーダーシップを涵養しながら 互いに教育し合える環境づくりを

寺川●新入生の学外オリエンテーションの評価をどうするかという話ですが、合宿をすると、学生たちはすぐ友だちになれるんですね。一つの大きなメリットだと思います。これが男女共学だと、なかなかそうは行かない。僕は共学で昔やったことがあります。でも女子学生だけなら、

あまりそういうことを心配せずに合宿ができます。それよりも、少数なんだけど、後輩のために、合宿でボランティアでリーダーを務めましょうという学生たちが20人ほど出てくる。この学生たちは、すごく成長すると思います。ある意味ではYMC A方式かなと僕は思っています(笑)。こういうリーダー育成が、女子大学なら組織的にできます。男女共学だと、なかなか難しい。同志社女子大学は、サマーキャンプやリトリートセンターで毎年この種の活動をしていて、リーダーシップのある学生を育てています。僕なんかより、よほど落ち着いて後輩学生を引っ張っているなと感じた人もいましたからね。

三宅●リーダーシップの育成については、寺川先生にまったく同感です。大学がどれだけ社会貢献できているかということだと思えます。教員の研究を通じて社会貢献するのは、本学では何も心配ないと思いますが、教育を通じて行う社会貢献は、いろんな分野でリーダーシップを発揮できる女性を育てることだと思います。特にこの、リーダーシップを

発揮できる女性の割合は、先進国中、日本が最下位です。企業の実務職、国会議員や地方議員、大学・学校の管理的なポジションについて、重要な意思決定に参画できる女性が少ない。社会が変わるといのは、制度が変わること。そこに女性をもっと参画して女性と社会的弱者の利益を代弁していかないとけない。日本も2050年には、4割が高齢者になり、その6割は女性だそう。日本の将来はおばあさんたちが支える(笑)。ちょうど今の学生たちが60歳前後になる時ですね。将来日本を支えてくれる女性を育てるんだという気概をもって、私は毎日大学に来ております。

寺川●同志社女子大学では3年生演習と卒業研究を分けているんですが、これは欠陥。古い、伝統的な学校だと、3・4年生、大学院生が一緒になって授業をしていることがあります。すると縦のつながりができる。その中で先輩の学習活動を見て後輩が育ち、後輩に教えて先輩が育つという、これは学生同士が切磋琢磨し合い、影響し合い、教育し合えるシステムなんです。本来はこのような姿が

望ましいんです。学年を超えて一緒に学ぶシステムが同志社女子大学には欠けている。それを補うシステムを増やせば、もっと人材が育つてくると思います。

しかし同志社女子大学では、教員が教えるシステムしかないんです。薬学部などでは学生同士が刺激し合うシステムが育つていくと思うんですよ。それを文科系の授業でも行いたい。演習室はたくさんあるので、やればできると思う。ちょっと苦言を呈すれば、教務課は教室管理ばかり。何でも管理するのが好きなようにみえる。学生が多少汚したつていいじゃないですか。物が壊れたら、直せばいいこと。それより学生が育つことの方が大事だと考えたら、もつと違う対応ができると思うんですがね。あまり言うところ「それは違う」とお叱りを受けるかもしれません（笑）。

そういう点で同志社大学は、全体から見ればどうか分からないけれど、例えば明徳館の地下には学生がたむろする空間や部屋がいっぱいありますよね。同志社女子大学にはああいふものが図書館の横ぐらいにしかない。来年からはある事務

は制約が多いかもしれません。

学生の支援体制だけでなく 教員の研究レベルも向上させて さらに満足度の高い大学を目指す

太田原●至れり尽くせりという言葉は良くないですが、サポート体制が共学とは違うなあと感じます。今までのお話をまとめると、企業だけが社会ではありませんが、大学名を伏せてエントリして内定を取って、ふたを開けてみたら最近女子大学の比率が上がってきているじゃないかと。こんなふうになるといいですよね。社会の各方面で「これは女子大学の教育効果に何かあるんじゃないか」という形で、女子大学の良さが社会に浸透していくというプロセスが理想的ですね。

さて最後に、同志社女子大学は受験生の期待に今後どのように応えていくのか、また見失ってはいけないこと、改革のポイントなどについてお願いします。
天野●専願率は低いけれども、ここへ来て良かった、そして卒業する時に良かつ

室や教室を学生に開放してもらうことになっていきます。学生が自分たちで集まって何かできる場所をたくさん作ってやらないと、学生たちは育つてこないと思います。そういう面では、同志社大学の方が進んでいるのではないでしょう。ただ、一方で共学では、やはり男性がリードするという面があるんでしょうけどね。

太田原●そんなこともないですよ。男子学生は女子に押されています。僕はゼミでよく「ここは女子大学か」と怒っているんですが、男子だけ隔離してサポートしようかと思うくらい（笑）。私のゼミだけではなくて、商学部の教員みなが経験しています。

三宅●在学中はそうなんだけど、一般社会に出ると、やはりリーダーシップを発揮できない女性が多いと聞きます。

天野●私も、どちらかというと女子学生は一步引いているというイメージがありますね。文科系で女子が多くても、少数の男子学生がリーダーシップを取ってしまっているというのが、わりと常態化していると思います。しかし同志社女子大

たと思ってもらえるような大学にしていきたいですね。ホームカミングデーを見ていると、そういう卒業生はすごく多いです。個々の授業の満足度も大事ですが、卒業してからの満足度も大事。卒業後に「あの授業であんなことを言ってくれたのが良かった」などと、記憶に留めてくれている人が多いんです。

アピールや広報についてですが、大学内部に向けて広報をしても、うまく伝わりにくいことも多いと思います。よく観光学や社会学でも取り上げられますが、口コミの持つ力は結構大きいと思うんです。学生が教育実習へ行ったり、卒業生が大学に戻ってきたりした時、「同志社女子大学はいいよ、こんなメリットのある大学だよ」と言ってもらえるようにしたいですね。マスコミのような大きな発信力はないかもしれないけれど、地道な積み重ねで良さが伝わっていくような大学にしたいです。

寺川●この大学に入って良かった」と思えるような教育をしていくのは当然のこと、私たち教員も研究によって自分のレベルを高めながら、その成果を学

生の学生は非常にしつかりしていて、少数かもしれないけれど、それにシステムティックなのかもしれないけれど、学生が自発的に提案をしたり、下級生を指導したりという動きは、共学では見られないものがあると私は感じました。

寺川●そういう面でも、もう少し教育のシステムを変えてほしいなと僕は思います。

天野●もしかしたら2009年のキャンパス整備の中で、そういうことができるかもしれないですね。

寺川●僕は全教員のゼミ室を作つてほしいと言ったんですが、それはできませんでした。でもそういう部屋があれば、そこに先輩、後輩が集まって、学生たちでいろんなことができると思うんですよ。いろんな形の人間関係もできるし、啓発もできる。

三宅●ロールモデルが大事ですからね。

天野●私の研究室には1期生しかいないので、その部分の教育が全然できない。それを2期生以降に期待したいですね。現代社会学部では学生の数が20・30人というゼミもあるのですから、ハード面で

生に還元していくことが必要だと思います。教員も学ぶ姿勢を示していかないと、本当の教育はできないのではないかと思います。教育や研究の内容はほとんど公開していますから、志願者の皆さんにもどんどん調べていただきたいですね。

三宅●私は、受験生の皆さんが、男であれ女であれ、どういう階層であれ、どういう民族的背景を持っていようと、どの年齢であれ、全力で皆さんをサポートします。属性などすべて取っ払い、一個人として対峙して、皆さんの可能性をできるだけ引き出したい。何でも思いっきり楽しくやりたいと思います。ぜひ同志社女子大学へ来てください（笑）。

森田●オープンキャンパスでも言ったりしていますが、同志社女子大学は、入学してから良さが分かってもらえるという自信があります。どうしても受験勉強の過程では、その大学がどんな教育環境を持っているかなどに関係なく、偏差値上位校に入るのが受験生のステイタスシンボルであるわけですね。それから見ると、本学の薬学部の学生たちは、ここが第一志望だった人はそう多くはないけれど

も、入って数か月経ってから「ここで良かった」と、多くが思ってくれているようなんです。彼女たちの満足度には高いものを感じますので、入ってから良さを感じてもらえる教育を、われわれは実践しつつあるんだろうなと感じます。

満足感を得てもらっている理由の一つには、アドバイザーとアドバイジーとの距離を思い切り近づけていることがあると思います。薬学部では5人くらいのアドバイジーに教員1人を配置して、ずっと持ち上がり担任制を敷いています。その中でいろんなことが相談できたりする。そういう体制が、今のところ薬学部ではうまく回っています。

小林●全国の女子大学には、危機感から共学化していくところが多いのですが、文化もそうなんです。マジョリティーではなくマイノリティーから生まれているものも多いと思うんです。ですから、全国的な共学化という流れの中で、同志社女子大学は今の文化を大切に、いろんな文化が生まれる源泉であってほしいと思います。

太田原●卒業生との連携については、ど

うでしょうか。

寺川●同志社女子大学の同窓会は、非常に特殊な形になっています。同志社大学とはちよつと違う。女子中・高校の卒業生と女子大の卒業生とが同じ同窓会を作って、同志社の中では評議員会に評議員を出している。つまり、女子大学だけの同窓会がなかった。女子中・高校を出て、同志社大学に進んだ人も同志社女子大学に関わる同窓会にいるわけです。これは同志社の組織の問題としても考えてほしいものです。このあたりが、ちよつと複雑です。そこで2002年に女子大学だけの同窓会組織（同志社女子大学同窓会《Vineの会》）を作り、卒業生との連携を深めていこうとしています。卒業生を大事にしていこう、卒業生から大事にしてもらおうという取り組みを始めています。

同志社大学との関係の今後

太田原●ありがとうございます。本日は皆さんのお話を伺って、同志社女子大学は、同志社大学とは随分違う大学だなと

いう気がしました。その上で、蒸し返すようですが、同志社大学は社会学部や生命医学部、スポーツ健康科学部を作り、女子大学との相乗効果というよりは、何か共食いしているところもあるのかなという気がします。お話を伺っていると、例えば大学院の重点化も進めるとなりますと、同志社女子大学は同志社女子大学でフルセットで総合大学を目指していくのか、というふうにも受け取れました。その一方で、この2校はもつと連携もしていかなければいけないとなると、2校の関係はこれから少し難しいのかなという気がします。2000年度以降、転換に成功して成長路線にあるのであれば、両校の有益な連携などというのはもう少し先の話で、同志社女子大学は同志社女子大学で行くところまで行つて、連携はその後の話なのかなと。

森田●薬学部サイドから言わせていただくと、同志社大学に医学部ができた頃が、その時なのかなと思います。いつのことになるか分かりませんが。

寺川●学校法人同志社としての経営効率から言えば、合体した方がいいと僕は思

いますよ。同志社全体から見ても、その方が有益だというのであれば、そういう方法もあるでしょう。ただ、女子大学の立場からすれば、合体した方がいいと思う人もいますが、ここでわれわれ自身で頑張りたいと思っている人もいます。いま置かれていた立場でもつと努力しておかなければ、吸収合併という形になると、吸収される側というのは悲惨なことになります。本学の学生にも教員にとつても大変なことになる。そうはなりたくない、合併するなら対等な形で行いたいと思つているわけです。トップに立つ者としても、当然そういうふう努力する。そのためには、やはり発展していかざるを得ない。体力を強化していかざるを得ないと僕は思っています。

天野●女子大学が、例えば大幅な定員割れを起こして、誰も来なくなつたという状況なら、社会的意義が低下したという判断ができると思いますが、実際そうでない。受験生や社会からの需要があることを、われわれは認識していきたいと思います。それから先ほどの大学院のお話ですが、国文学など、ある程度体系的

になっている学科はいいんですが、現代社会学部のように一つの専門分野に1人しかないような状況では、大学院を作つても大学院教育ができません。その点では、同志社大学との連携をもつと深めていく必要があると思います。

太田原●同志社大学大学院への推薦制度はあるんですか。

天野●あります。現代社会学部は特に。

寺川●法学研究科とかね。総合政策科学研究科には4、5人行っています。逆に言うと、こちらの大学院が手薄になっている。

森田●薬学部にも、生命医学科学研究科から推薦枠をいただいていますよ。

寺川●日本文学科などは、2年次編入でとられてしまっている（笑）。そういう現象も起こりますね。いろんなことはお互いあると思うけど、大学運営や教育については、どんな状況になろうともやっつけていける体力はつけておこうとしています。そのための努力を怠つては、大学としてだめになると僕は思う。

三宅●2007年の常任委員会の報告書で「同志社女子大学ブランドデザイン」

が発表されています。そこに「一流の教職員による一流の教育、一流の教育環境、一流の学生生活が可能な環境を提供し続けることにより一流の学生、卒業生は育まれ、社会で一流の活動ができると考える。本学の教育、学生生活で最高の満足感を得た卒業生が、社会で活躍し、もう一度母校に帰りたくなるような『商品』を提供し続けることこそ、同志社女子大学ブランドを確立することと確信するものである」とあります。

太田原●「商品」とは、提供する教育、学習環境、同志社女子大学としての付加価値を付けるシステムという意味ですね。

三宅●私はこれを読んだ時、すごいと思いました。常に一流を目指す大学でありたいものです。

太田原●同志社女子大学の未来は「一流」がキーワードですね。本日はありがとうございます。

（2008年7月2日女子大学学長室）